



自然遊学館 だより



2010 WINTER

No.54



■2010.1.22 発行 貝塚市立自然遊学館

◆行事レポート

- 秋のハイキング「東手川」 1
- 館長と生きものの切り絵 2
- 化石採集 3
- 自然を食すⅡ 4
- ◆生きものよみもの
- ザリガニの胃石 5
- ◆泉州生きもの歳時記
- 貝塚市の脊椎動物は何種? 6
- ◆館長コーナー
- 冬 5.「風」考 7

◆調査速報

- 和泉葛城山調査日誌
(2009年10月~12月) 9
- ◆クイズ
- 生きものクロスワード 11
- ◆来館者からのご提言 12
- ◆寄贈標本の紹介 13
- ◆スタッフ日誌 14
- ◆お知らせ 15

表紙の写真：アカウミガメ。大阪湾に特に夏期、来遊する。



◆行事レポート

秋のハイキング「^{とてがわ}東手川」

場所：貝塚市蕎原～東手川

日時：2009年10月17日(土) 11:00～15:30

参加者：21名

近木川の上流は、春日橋で本谷と東手川に分かれます。本谷は和泉葛城山Aコースへの入口でもあり、自然遊学館の行事としては、源流探検を毎年行っています。東手川の方は、春日橋から少し登った所に湧水の龍王がありますが、行事としては初めての場所になります。年度初めの計画では、昆虫の行事でしたが、何度か訪れた機会に、昆虫を目にすることが少なかったので、単にハイキングにしました。

蕎原箱谷の駐車場に集合して、嘉平垣外橋を渡って近木川の左岸側（南側）の細道を上り、製材所で右岸の道に合流し、休場橋、トイレ、春日橋、龍王、東手川橋から東手川林道を上り、ムカシトンボのヤゴを見てもらうコースを考えました。ところが当日の行事開始直前に雨が降り出し、予定通りには行かなくなってしまいました。

午前中は断続的に雨が降り、雨具を着たり脱いだり、忙しくなりましたが、何とかイモリ、アマガエル、トノサマガエル、タゴガエル、ヒバカリ（ヘビのなかま）などを見ることができました（図1）。畑のまわりに実っていたカラスウリの実をつぶして、カマキリの頭そっくりの種を出したりして遊びました。



図1. ヒバカリを触れるかな？

東手川橋の下流側で昼食をとっている間だけでも、雨がやんでくれて助かりました。その付近で、サワガニ、シーボルトミミズ、ババヤスデの仲間（図2）など、割りと大きな獲物が採れ、子どもたちは興味津々（怖々と）の様子で触っていました。その付近にはイノシシが土を掘り返した跡がたくさんあり、植物の根やミミズを食べていたのかもしれない。



図2. ババヤスデの一種（体長約5cm）

午後、東手川林道を上り始めた時から大雨となり、川に降りるのをあきらめて引き返すことにしました。結果としては、引き

返す時間を誤ってしまいました。

ただ、ゴールに近づくうちに晴れ間が出てきて、トゲナナフシやドジョウが採れたり、駐車場そばの水たまりにメダカやヤゴがいることが分かって、採集に夢中になり、中々解散できないことになりました。

9月29日に行った植物調査の際には、メナモミ、ハナタデ、ノコンギクなどかわいい花が咲いているものや、レモンエゴマなど香りのする植物が観察されたのですが、当日はほとんど紹介できませんでした。そんな雨の中にも負けず、見つけたもの全てを興味深そうに見入り、次々と新しい生きものを採集してくる子どもたちの好奇心に、すごいなあ、と感心した一日でした。

(岩崎 拓・湯浅 幸子・西澤 真樹子)



初めての方とリピーターとはその切り口が違います。切り絵はその切り口のシャープさが求められます。だから、初めての方は必死で作品作りしました。

イシダイ、カタクリ、シャコ、オオルリなどを作品化しました。額に入れ、合評をして終わりました。

館長と生きものの切り絵

場所：貝塚市立自然遊学館

日時：2009年10月25日(日)13:30～16:00

参加者：9名

全く初めての方が3名、リピーターが5名の参加でした。何回か参加されている方でも、自分のオリジナル作成は少し無理のようですので、私の原画のコピーを使って製作しました。コピーでも紙を切っていくながら、生き物の実体に近づけます。例えば、エビを切りながらエビの特性に気づきます。そうすることで確実に切り絵をする前と後とではエビの見方が変わります。そんな効果と願いを込めて製作にかかりました。



(川村 甚吉)

化石採集

場所：貝塚市蕎原箱谷

日時：2009年11月8日（日）10:50～15:00

参加者：46名

例年、人気を集めるこの行事、40人の定員に対し208人の応募があり、抽選で参加者を絞らざるをえませんでした。当日は、11月とは思えないほどのポカポカ陽気でした。山あいにある化石採集の現場でも、しゃがんでハンマーを振っていると、背中に降り注ぐ日射に上着を着ていられないほどでした。

講師には蕎原箱谷古生物研究会の高田雅彦さんと加藤守さんにお越しいただき、またボランティアスタッフとして、鈴子佐幸さん、この夏に学芸員実習を当館で行った近畿大学の須斉正也さんにお手伝い頂きました。



蕎原箱谷で化石を探す

参加者の皆さんはとても熱心で、午前中の1時間の採集の後、昼食をはさんで休むまもなく、すぐに採集を再開する方が多く見受けられました。講師のところへは次々

と採集したものを片手に「これは化石ですか？」と聞きに来る子供達が列をなしていました。化石と判定された時は、とても嬉しそうに、説明に聞き入る顔が印象的でした。



巻貝の化石を見つけたの！



私はスナモグリのハサミ化石を見つけたよ！

* 今回産出した化石

二枚貝：ナノナビス、エリフィラ、ヌクラ、ペリプロマイア

巻貝：シュードペリシテス

甲殻類：スナモグリ（ハサミの部分）

植物化石：木（幹）化石

生痕化石：サンドパイプ

（山田 浩二）

自然を食すⅡ

場所：貝塚市立自然遊学館多目的室

日時：2009年11月29日（日）12:00～14:00

参加者：26名



当日のメニュー

参加者募集の折、食すメニューを載せることが出来ませんでした。なぜなら、どんなものが自然の恵みとして採集できるかわからなかったからです。しかし、秋が深まってくる頃、「どんぐり」「むかご」「自然薯」「紅葉」を使いたいとイメージが膨らんできました。

どんぐりは遊学館前の歩道並木の「マテバシイ」を利用することにしました。台風一過の後、コンクリートブロックに落ちた新しいものを採集し、水洗い後熱湯消毒して乾燥し、保管しておきました。むかごは本年不作の年になりました。しかし、小さくとも見つけたら、保存しておきました。当日が近づいた21日和歌山県の四郷柿祭りに行き、偶然見つけたむかごを4袋購入して、予備としました。



大蔵栄養教諭の説明を聞く

紅葉や自然薯は筆者の畑周辺で茨と戦いながら用意しました。これで材料は十分です。材料集めの間、妻とメニューの開発に試行錯誤しましたが、何とかおいしいものが出来る自信がわいてきました。そこで、栄養教諭の大蔵先生や、国家資格の調理免許を持つ栗山先生にその旨を伝え、当日の打ち合わせを若干しました。

流石名人です。私たちが紅葉のてんぷらを揚げたときは黒くなってしまいましたが、栗山先生が紅葉をてんぷらにすると鮮やかな紅葉がより一層鮮やかに揚げられました。



栗山先生の指導

参加者は子どもからお年寄りまで幅広い年代でしたが、皆さんおいしく食べてくれました。最後に、どんぐりケーキを焼いて終わりました。残った材料はお土産にし、帰宅後の楽しみにしていただきました。



いただきます

(川村 甚吉)

かの度胸試しをしている様子に微笑ましくなります。



さわってみよう！ アメリカザリガニ

この容器には 10 匹程を一緒にしているため、脱皮時に共食いがたびたび起きているようで、バラバラになったザリガニのやわらかい死体が散らばっていることがあります。そんな時は水換えを行うのですが、ときおり直径 5 ミリ程の白い半球状の物が見つかることがあります。あれ？なぜこんなところにラムネが？いや、ビービー弾（おもちゃの銃の玉）か？？と思いきや、これは実はアメリカザリガニの体内で作られた胃石というものなのです。

◆生きものよみもの

ザリガニの胃石

展示の一つ、「ザリガニをさわってみよう！」コーナーでは、生きたアメリカザリガニを入れた容器を床に置き、自由にさわられるようにしています。来館する子供たちにとっては、好奇心をくすぐられるようで、ザリガニが隠れている竹筒や、割れた陶器の鉢をひっくり返して、ザリガニを見つけては喜ぶ声が聞こえてきます。園児や小学生の団体見学などでは、手でザリガニを捕まえることのできた男児が誇らしげに他の児童に見せていたり、捕まえられるかどうか



アメリカザリガニの胃石（左：凹、右：凸）

ご存知のようにザリガニの体は硬い殻（外骨格）で覆われていますが、この殻の成分は、炭酸カルシウムが約 47%、キチンが約 34%、リン酸塩が 8%、その他 11%です。脱皮が近づいてくると、殻を硬くしていたカルシウムが溶解し、胃に集められて 2 個の塊になります。これが胃石で、凹凸のある形状をしています。カルシウムのなくなった殻はやわらかく、殻を脱ぎやすくなるのです。そして、新しくつくられた柔らかい殻を今度は硬くするために、胃石を溶かしてカルシウムを殻に送り、胃石は無くなります。こうしたカルシウムのリサイクルは、海水よりもカルシウムの少ない淡水環境に生息するザリガニにとって、資源の有効な再利用にもなっています。

また、胃石はその昔、オクリカンクリと呼ばれ、胃薬などとして用いられていたそうですが、効果の程は???

(山田 浩二)

◆ 泉州生きもの歳時記

貝塚市の脊椎動物は何種？

今年が寅年ですね。干支（えと）の動物を分類すると、哺乳類 9、鳥類 1、爬虫類 1、想像上の動物 1 ということになります。空想の動物である辰（竜）は除いて考えるとして、すべて陸生の脊椎動物です。特に哺乳類が多いですが、貝塚市には、どのような脊椎動物がすんでいるのでしょうか。

2003 年 12 月に創館 10 周年を記念して動

植物のリストを発行しました。そのリストには、両生類 10 種、爬虫類 13 種、鳥類 173 種（+帰化種 5 種）、哺乳類 11 種があげられています（西澤、2003）。これらの種数は自然遊学館による調査や市民の方々からいただいた寄贈標本や情報によるものです。野生動物のリストなので、犬や猫などのペット、豚や牛などの家畜、そして私たち人間は、哺乳類の種数に含まれていません。

あれから 7 年が経ち、リストも更新されています。鳥類は 2007 年の貝塚の野鳥展開催時には 178 種になっていました。ただし、夏鳥や冬鳥など季節ごとに入れ替わりもあり、たえず 178 種がいるわけではありません。今回は魚類と鳥類を除き、両生類、爬虫類、哺乳類の現時点でのリストをまとめてみました。

貝塚市で確認された両生類・爬虫類・哺乳類のリスト
(自然遊学館記録分 2009年12月まで)

目・亜目	科	種
両生類		
サンショウウオ目	サンショウウオ科 イモリ科	ブチサンショウウオ イモリ
カエル目	ヒキガエル科 アマガエル科 アカガエル科	ニホンヒキガエル ニホンアマガエル タゴガエル トノサマガエル ツチガエル ウシガエル ヌマガエル
	アオガエル科	シュレーゲルアオガエル カジカガエル
爬虫類		
カメ目	ウミガメ科 バタグールガメ科	アカウミガメ クサガメ ニホンイシガメ
	ヌマガメ科 スッポン科	ミシシッピアカミガメ スッポン
トカゲ目	ヤモリ科 トカゲ科 カナヘビ科	ニホンヤモリ ニホントカゲ ニホンカナヘビ
ヘビ目	ナミヘビ科	タカチホヘビ シマヘビ ジムグリ アオダイショウ ヒバカリ ヤマカガシ ニホンマムシ
	クサリヘビ科	

哺乳類

トガリネズミ目	トガリネズミ科 モグラ科	ジネズミ コウベモグラ ヒミズ アブラコウモリ ノウサギ ニホンリス ムササビ カヤネズミ ハツカネズミ アカネズミ ヒメネズミ
コウモリ目 ウサギ目 ネズミ目	ヒナコウモリ科 ウサギ科 リス科 ネズミ科	スナメリ タヌキ イタチ チョウセンイタチ テン アナグマ アライグマ ニホンイノシシ
クジラ目 ネコ目	ネズミイルカ科 イヌ科 イタチ科 アライグマ科 イノシシ科	

引用文献

西澤真樹子 (2003) 貝塚市の両生類・爬虫類・哺乳類. 「貝塚の自然－貝塚市立自然遊学館創館10周年記念号－」. pp. 196-215.

(岩崎 拓・岡田 恵太郎)

◆館長コーナー

冬5. 「風」考

これらはすべて、これまでの自然遊学館だよりや年次活動報告書「貝塚の自然」で発表してきたものです。このうち、海にすむアカウミガメとスナメリは、死体が貝塚市の海岸に打ち上げられたので、リストに加えました。

両生類は1種増えて11種、爬虫類は2種増えて15種になり、哺乳類は8種増えて19種になりました。ニホンザルやシカの通過個体など、おそらくいるはずだけどまだ確認されていない種もあります。今回のリストに載っていない種を見つけたという方は、ぜひ自然遊学館までお知らせください。



両生類で唯一追加のシュレーゲルアオガエル
(2006. 6. 6 秋山川、木室仁太・田中貴大)

「垣根の 垣根の 曲がり角 たき火だ
たき火だ 落ち葉焚き あたろうか あた
ろうよ 北風 ピープー吹いている」文部
省唱歌「たき火」です。この詩の情景は「強
い北風が吹いていて、曲がり角が風裏です。
そこに北風が落としていった落ち葉があり、
それをたき火にしています。あたっていき
ましようか。」という意味だと勝手に想像し
てみました。団塊の世代の方たちまでには
理解できる情景でしょう。

落ち葉という言葉から真冬ではなく晩秋
初冬といった季節でしょう。さらに、2番
で出てきます「山茶花 山茶花 咲いた道」
からしてこの季節であることは言うまでも
ありません。その頃に吹く風は「北風」な
のです。泉州地域に生まれ育った私には晩
秋初冬の風といえば「北風」なのです。



市民の森に吹く風

真冬にはあまり北風は吹きません。ほとんど西風です。しかし、一般的には冬の季節風といえば北風と思い込んでいるのです。確かに北よりの風も吹きますが、西を中心にした風がほとんどのような気がします。年間風向統計などという領域があり、実測したとすればすぐわかることですが、年間を通じて西風が圧倒的に多いのでしょうか。



二色の浜に吹く風

厳しい寒さの冬から春にかけては三寒四温といわれますように、春は一とびにやってきません。寒さをぶり返しながら温かく

なってきます。だから、暖かい日もあれば寒い日もあります。早春の風は「東風吹けば匂いおこせよ梅の花 主なしとて春な忘れそ」の東風にあると言われていています。東風は春風と同義語のように使われています。しかし、早春は三寒四温であるように、風の方向も定まらないようです。東風もあり、春一番のように南風もあり、前述の西風も吹きます。春本番までの風は全方位の風と言えそうです。

春から夏、あるいは初秋の風は西を中心に南風でしょうか。私は魚つりをします。だから風には敏感です。漁を生業とする漁師さんにとっては生死にかかわる重要な問題です。泉州地域では北風を「カミカゼ」とか「キタ」と言われています。南風は「マゼ」です。西日本で使われています「ハエ」は聞いたことはありません。東風も西風もそのまま「ヒガシ」「ニシ」と聞いています。冬の西風がかなり強く吹いても漁師さんは漁に出ます。冬の風は当地域には風が直接当たる波打ち際の破壊力は凄いですが、沖に出ますと六甲山地や淡路島のお陰で風裏になるそうです。しかし、晩春初夏の頃、マゼが吹きますと船は沖へ沖へと流され、大変なことになるようです。そのマゼの海岸線は静かそのものなのにはです。



強風で一方向に寄せられた松葉

当号は身近な「風」を漠然ととらえ、述べてみました。ダンボール箱に熱源を入れ、上部に穴をあけ、そこへ風車を置くと回転するくらいの実験能力しかない私には「コリオリの力」などという難問との関連などわかりません。でも、いつか稿を改め、生活と風をテーマに述べたいと考えています。

(川村 甚吉)

バッタ目では、ヒメクサキリが昨年の予備調査と同じく観察できました(図1)。クサキリを寸詰まりにしたような体型で、山頂周辺で結構いるようです。



図1. ヒメクサキリ♀

モリオカメコオロギやマダラスズの鳴き声も聞こえました。ナナフシ目はエダナナフシだけ、カマキリ目はオオカマキリだけが観察できました(図2:威嚇のポーズをとるメス成虫)。

◆調査速報

和泉葛城山調査日誌

(2009年10月~12月)

10月13日、和泉葛城山昆虫調査

10月に入ると昆虫の種数が減るかなと思って調査に行きましたが、まだそれなりに多くの昆虫が観察できました。数が目立って多かったのはアカタテハで、2時間ほどの調査で50匹以上目撃しました。その他、チョウではルリタテハとキタテハが少々いました。



図2. オオカマキリ♀

その他、自然遊学館に所蔵されていない種として、ホシアワフキ、ベニモンツノカメムシ、ウスキホシテントウ、タイワンオオヒラタアブなどを採集しました。

11月5日、和泉葛城山昆虫調査

紅葉真っ盛り的一步手前ぐらいになっていました。何かもの悲しい雰囲気がただよっています。その原因は、チョウやトンボが全く見られず、飛んでいる虫はユスリカやケバエの仲間だけで、鳴いている虫もマダラスズだけだからかもしれません。1ヶ月前の調査と比べると、確認できる種数はかなり減りました。

葉の上や地面にいる虫も目立ちませんが、それでも目を凝らして見ると、まだエダナナフシ、トホシカメムシ、セアカツノカメムシ、ヒメハサミツノカメムシ、モンキツノカメムシなどがいます。

そんな中、樹上の葉を網で掬うと、クチキウマの幼虫が入りました(図3)。自然遊学館には、創館の準備に当たっている1992年の9月12日に同所で、宮武頼夫先生が採集されたオス成虫が1個体所蔵されています。その標本をクチキウマの仲間の分類を研究されている石川均氏に見てもらったところ、「キンキクチキウマに似ていますが、産卵管の形が決め手になるので、メス成虫でしか区別できません」という返事を頂きました。残念ながら、今回の個体もオスでした。



図3. クチキウマ属の幼虫

12月1日、和泉葛城山昆虫調査

すでに紅葉はほとんど落ちていました。キノコにたかるヤマトビムシ類が目立つ以外は、昆虫を目にすることはほとんどなく、写真に撮れたのも、ハタケヤマヒゲボソムシヒキキだけでした。



図4. ハタケヤマヒゲボソムシヒキキ♀

虫に目がいかない分、キノコに目が行ってしまいます。ツリガネタケなどのサルノコシカケ類、朽木に生えるカイガラタケ、ブナの倒木に生えるヌメリハツタケモドキやクチキトサカタケなどの写真を撮ることが出来ました。

(岩崎 拓)

◆クイズ

生きものクロスワード

問題A. 2文字の名前

このパターンは、数通り作ることができました。2文字で生きもの名前になっている組み合わせは200通り近くあります。

1	2
3	

ヨコのかぎ(ヒント)

- ① 海にすむ8本足の生きもの。
- ③ 児嶋格先生が好きなもの。

タテのかぎ(ヒント)

- ① 初夢としての順位は二番目です。
- ② 英語で「カープ」という淡水魚です。

問題B. 3文字の名前

このパターンも数通り見つけることができました。黒塗りの部分も文字という組み合わせは見つけることができませんでした。ヒントはやや難しくしてあります！

1		2
	■	
3		

ヨコのかぎ(ヒント)

- ① 二色浜にも生えている海浜植物。
- ③ 土の中にある細長い生きもの。

タテのかぎ(ヒント)

- ① 市民の森にも来る冬鳥。
- ② 地震が来る前にあばれる(?)魚。

問題C. 5文字の名前

このパターンは作るのがむずかしかったです。タテの①番はあまり知られていないので、ヒントを多めにしました。シダの仲間のうちでは覚えやすい模様があります。

1		2		3
	■		■	
4				
	■		■	
5				

ヨコのかぎ(ヒント)

- ① 「ミチオシエ(道教え)」という別名を持つ甲虫。
- ④ カレハガ(枯葉蛾)の中ではよく見る方です。
- ⑤ 13対の脚がある動物。さわると体が丸くなるよ。

タテのかぎ(ヒント)

- ① シダの仲間。〇〇〇シダには福岡県の地名が入ります。
- ② 背びれや胸びれが派手なドレスをまとったような海水魚。
- ③ 幼虫はウリの根を、成虫はウリの葉を食べる甲虫。

正月休みで作ってみました。なるべく貝塚にいる生きものの組み合わせを選びました。作り始めたときは、もっと簡単にできるものだと思っていました。答えが分かって読者プレゼントはありませんが、挑戦してください。また作ってみます。

(岩崎 拓)

◆来館者からのご提言

自然遊学館で来館者の方から注文を頂くことがあります。展示に関しては、「季節感の出るように更新できないですか」とか、ある年配の方からは、「種類の名前を漢字でも書いて欲しい」という要望を受けたことがあります。生体展示はともかく、この4月から昆虫の展示標本の更新がまったく出来ておらず、心苦しい限りです。また、「ホームページの生きものの画像に、名前だけでなくコメントを付けて欲しい」とも言われたこともあります。これもまだ対応できていません。

別の注文として、「農業害虫や衛生害虫は扱わないのか？、ホームページにも載っていないんやけど」とか、「標本にすることは命を奪うことでしょうか。命を大切にすることの方を教えるべきではないか」がありました。最初の方は害虫の殺し方を教えて欲しいということで、後の方は標本にするために命を奪うのはどうかと、反対のことを要求されているわけです。動植物と人との共生を考えると、「特定の虫に害虫というレッテルを貼るのはおかしい」と言い返すことは出来ません。現在の貝塚市の自然を記録として後世の方々に伝えるために、殺生をして最小限の標本を残すことは必要なことです。

えらそうなことを書きましたが、現在の自然遊学館では、この記録として残す活動が不十分な状態で、定量的な調査はもちろんのこと、キノコやクモなど身近なのにデータがほとんど蓄積されていないグループがあります（他の調査も分かりやすく解説

する努力は足りない点があります）。未来の貝塚市民が自然再生に取り組む事態に陥った時に必要なデータを提供できないのです。現在から過去を見ると、「昔は赤とんぼがたくさんいたのに」ということを言われても、赤とんぼの種類も分からないし、どれだけ増やせば元通りになるのか定量的なデータもほとんど残されていません。このままでは、未来の市民から同じような不満を言われてしまいます。

さらに、「貝塚市に自然遊学館という施設がありながら、なんで東山の開発を許したんや」という厳しい意見を頂戴したこともあります。自然遊学館が許可を出したわけではないのですが、それで、次というか最後というか、千石荘がどうなるのかという問題があります。千石荘（千石堀城址周辺）には、雑木林、草むら、ため池、小川、水田、畑があり、里山的景観が今も残されています。牛神池にはアンペライという植物が生え、ナニワトンボやベニイトトンボなどのトンボが生息しています。どれも大阪府レッドデータブックの指定種です。皆さんの中には千石荘でカブトムシやヒラタクワガタを採集して楽しんだという方もいると思います。

でも、ここは大阪市の所有地で、雑木林は基本的に立ち入り禁止になっています。人が入ることが少なくなった雑木林ではネザサが丈4mにも伸びて、入りにくくなっている場所もあります。人と自然の共生という観点からはもったいない話です。共生の一つの意味は、いろいろな人が多様な生きものとふれ合うことで、それは自然再生の際にも目標となることです。千石荘を身

近な生きものに出会える自然公園のようなものとして利用できれば、現在の市民にとっても未来の市民にとっても良いことだと思います。

(岩崎 拓)

◆寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

(※2009年12月分まで)

<鳥類>

- ◆西澤真樹子・鈴子佐幸さんより
ウグイス 巢1点
貝塚市馬場 2009年11月23日採集
- ◆吉田隆さんより
シロハラ 死体1点
府立少年自然の家
2009年12月6日採集

<爬虫類>

- ◆五藤武史さんより
ニホントカゲ 成体1点
高石市高師浜 2009年12月1日採集

<軟体動物>

- ◆鈴子佐幸さんより
オキシジミ 1点
ムラサキガイ 1点
クログチ 1点
龍野市新舞子 2009年10月4日採集

- ◆小菅丈治さんより
オサガニヤドリガイ 5点
沖縄県西表島 2009年1月採集

<甲殻類>

- ◆森本静子さんより
エビノコバン 3点
阪南市貝掛の池 2009年11月19日採集

<昆虫>

- ◆濱谷巖さんより
ウスバキトンボ 成虫1点
岸和田市別所町 2009年10月12日採集
 - ◆石井翔生愛さんより
クビキリギス 成虫2点
クサキリ 成虫1点
貝塚市蓄原 2009年10月17日採集
 - ◆和田太一さんより
ホソミュスリカ属の一種 幼虫5点
大阪市南港野鳥園 2009年10月14日採集
 - ◆天羽真嵩さんより
ヒメカマキリ♀ 成虫1点
貝塚市蓄原 2009年11月9日採集
 - ◆浅井真紀子さんより
アカスジキンカメムシ 幼虫1点
千葉県白井市 2009年12月13日採集
- ### <写真>
- ◆濱谷巖さんより
アゲハモドキ 幼虫1点
岸和田市別所町 2009年10月12日撮影
 - ◆食野俊男さんより
ナベヅル 1点
貝塚市麻生中 2009年11月13日撮影
ナベヅル 5点

貝塚市麻生中 2009年11月14日撮影

◆五藤武史さんより

キイトトンボ♀ 成虫1点

貝塚市名越 2008年6月14日撮影

ハラビロトンボ♂ 成虫1点

貝塚市馬場 2007年6月8日撮影

オオアオイトトンボ♂ 成虫1点

貝塚市馬場 2007年10月22日撮影

ナベヅル 1点

貝塚市麻生中 2009年11月15日撮影

ナベヅル 1点

貝塚市清見 2009年11月16日撮影

ナベヅル 1点

貝塚市麻生中 2009年11月16日撮影



麻生中にて 2009.11.16 五藤武史氏撮影

2005年以來の貝塚市への飛来となりました

◆杉野重明さんより

イタチ 死体1点

貝塚市馬場 2009年12月24日撮影

◆スタッフ日誌

10月3日、着々と工事の進んでいる近木川河口右岸の人工（再生）干潟造成について、ワークショップが行われました。現在

の干潟にはどんな生きものがいるのか参加者に紹介しながら、河口を見て歩きました。子供達が干潟に触れ合える空間として、期待されています。完成予定は2011年夏です。

(浩・湯)

10月11日、以前から近木川の水質を調査されている上之山賢治さんが近義大橋で1日の水質の変化を調べるということで、スタッフ3名が8時間交代で助手を務めました。スタッフは1人8時間なので疲れはなかったのですが、上之山さんは24時間続けて調査をされ（10月なのに夜明けには気温が10℃を切りました）、さらに御自宅の研究室で持ち帰ったサンプルの分析をされたそうです。お疲れさまでした。

(浩・岩・鈴)

10月14日、今年（2009年）の3月1日に近木川河口で松下宏幸さんが拾ったオオタカの死体の剥製が出来上がり、鳥の剥製コーナーに展示しました。3月7日に千石荘大井谷池で藤村雅志さんが拾ったカワウの死体も同時に剥製にしてもらったのですが、こちらは専用ケースを作るために10月28日にお披露目となりました。（岩）



オオタカ剥製



カワウ剥製

10月15日、木島小学校4年生の環境学習に同行しました。近木川中流の三ツ松大橋と水間寺辺りで川原に降り、動植物の観察です。子供達はタモ網を持って川に入り、トンボのヤゴや魚を捕まえたりして大興奮のようでした。郷土の自然を愛することにつながっていけばと思います。(浩・湯)

12月27日、今年の生きものの世話を終えました。来館者の皆さま、楽しんでもらえましたか。来年もがんばって世話をしますので、ぜひ見に来てください。(鈴)

◆お知らせ

遊学館フレンズ♪

いきものがかり募集！

自然遊学館では周辺で見られる動植物を標本だけではなく、魚やカメ、カエル、昆虫などの生体を飼育展示して紹介しています。生きもの好きだけど、家では飼うことができない方など、本館スタッフと一緒に生きものの世話を体験してみませんか？



アカウミガメの剥製を展示

11月22日に玄関ホールにアカウミガメ♀の剥製を展示しました(下の写真の右側)。2008年6月に岬町の定置網に掛かって死んでいたものです。自然遊学館だよりの表紙にも使われています。2009年の夏に開催した「ウミガメ展」では床に置き囲いをして展示していたのですが、常設の展示では壁に掛けました。左側はアオウミガメで、よく「アオウミガメの方が赤いの？」と来館者に言われますが、これはアオウミガメの剥製が赤く変色したためです m()m



* 自然遊学館だよりのバックナンバーは、下記のホームページよりご覧いただけます。

自然遊学館だより 2010 冬号 (No. 54)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/>

発行日 2010.1.22

この小冊子は市内印刷で作成しています。